幻想とリアル　仮想と現実世界の官能

夢のような時間。

ホットパンツで広場の遊具に乗って無邪気に遊ぶ・・・・。

太ももがむっちり出ている・・・・・。

そんな時間はあっという間に過ぎる。

ぼやけた・・・だけど鮮明な薄桃色のような実体のない煙に似たものの中で男

女は交わっていた・・・・・。

鮮明な太もも。だけどどこかぼやけているような気がする。

そう、だからそれは夢・・・・

？？？？

そうではなかった。

・・・・・・・・・・・・・・。

男女たちはしっかりとログハウスの中にいた。

山の中腹。
近くには街が見渡せる丘。広場、つり橋とバンジー台があった・・・・・。

ログハウスは紛れもない現実だった。

・・・・・・・主人公の名前はアキト。

ログハウスの横には花や木々が生えている。

木の壁はところどころ剥がれ崩れかかっている。

温暖な気候。寒さに困ることはなかった。

周囲の街も平穏そのもの。

しかしそれだけの安らぎだからこそ、

そこで見ていたのは

ユートピア。まるで絵に描いたような・・・・。

・・・・それ以前の話に移る・・・。

・・・・・・・・・・・・・・。

少し古びたマンションの３階・・・・・。
そこで男性のアキトは夢を見ていた。

彼は赤くぼやけた倉庫の片隅の小さな落書きを見たことで、セックスという・・・・時空の世界へ迷い込んだ。

その落書きからの物質的距離はそれほど遠いものではない。

彼はただ時空のトンネルの中を歩きマンションの階段を上っただけである。

そしてその少し暗くなったマンションの一室で、そのぼやけた夢から更に夢の中へ・・・・・。

ぼんやりと

だけどはっきりとした

裸の奥底で・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・。

すぐ近くには太ももがあった。

色は白っぽい艶（あで）やかな肌色であ

る。

「・・・・・ずっと吸っていたい・・・」

あまりに自由であるため

それは広場でホットパンツを穿いて肌に密着した白いＴシャツを穿いて少女

で遊具にまたがり遊んでいるに近い。

ずっとずっと裸で遊んでいることに近い。お尻をひっつけて滑る滑り台のような・・・・・

ビジネスバッグとランドセルを背負った

裸の少年少女、大人なのである。

・・・・・・・ぼやけた時空は

少し時間に呼応し移動し

まるで列車のように裸の男女が決して
逃げられない場所となった。

目覚めると雨音。

「・・・・・・・一体何がどうなっているの？？」

ログハウスにいる。

・・・・・・・・・これが、アキトがログハウスへ来た経緯である。

つまりはそれまでの経緯でぼんやりとした時空を旅していたという意味である。

アキトの周囲には他の女子たちがいる。男子もいる。

自分たちがどういうことになっているのかいまいち分からないという現実。

しかし事実はみんな裸。

セックスだけをしたいのである。

クリトリスが快楽に呼応し、

太ももお腹おへソの部分まで鋭敏に反応する。

脱ぎ捨てられた衣服は雨音の外の籠（カゴ）の中。

確か・・・・・・

ぼんやりとした薄い靄（もや）の中で

夢を見ていたはずなのに。

そしてそれはここへ来た全員に共通していた。

ログハウスの周囲には

この日、雲ゆきの怪しい空。

広場やバンジーなどの他にも近くには
小さな噴水などもあった。

奇妙な坂には色とりどりの噴水が噴射

している。ファンタジーのような奇抜な世界。

ログハウスのすぐそばの道。

ベンチの上で抱き合うカップルが二組。

ＯＬのようなオフィスの衣服を着て無我夢中でキスをしている。

口紅がはだけ、胸元も露わになる。

真っ白なブラウスがしわくちゃになっている・・・・・・。

混じり合わせる想い。

・・・・・・・・・二人はこの後は夜、明け方までずっとずっとホテルの中でセックスをする予定である。

少し狭い木の小屋の中。

部屋の至る所に扉がついている。

アキトはそこから少し眠たそうにやってきた。

扉が開く。

他の男女たちも次々とやってきた。

元々男女たちがいた薄ピンクの靄（もや）はまだこのログハウスの中にもかすかに残っていた。

完全に鮮明なもの・・・・というものはやはり不完全なこの世界にはないのかもしれない。

・・・・・汁まみれになって太めの股を広げ・・・・・混じりあっているのだ。

少しシュールで不思議な状況。

ずっとずっとシックスナインをしている。

「シュールだね、なんか・・・・・このままずっと舐め合っていようよっ！！」

シックスナインは時間に呼応して

まるで “ホラー” のようなシュールな状況と化す。

優しく・・・・・だけどとても激しく。

割れ目からあふれ出るような水を全て飲み干すのが・・・・男性たちの役割なのである。

そしてその一員がアキトだった。

無我夢中の男女のすぐそばには

とても大きな壺があった。

そこから淫猥な煙が出ていた。

しかしその実態は煙などではなく

ログハウスの地の下の

温泉の湯気であった。

・・・・ここへ来るまでの過程をあまり覚えていない青年のアキト。

しかし・・・・・木の小屋へ来たときは夢中になる。どこまでも・・・・女体がある限り。

扉から裸のむっちりボディの美人女性

が出てくるのだから・・・・・。

だけどスレンダーでありながら肉付きは良く、お尻も引き締まっている。

もちろん皆、無毛である。

やけにリアルな木の小屋・・・・・

ここからはたった二つある窓に中腹から見渡す街が見える・・・・・

昼夜関係なく・・・夜も肌寒い朝も若い男女同士で混じりあっているこんな小さな一室があることなど街の人は何も知らない・・・・

もっともっともっとどこまでも淫乱に・・・・・。

乳房は白く・・・・・弾力があり腰が括（くび）れている。若いツルツルの脇が見える。

おへソは股と繋がっている。

肌に流れる淫乱さ・・・・・

（体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました）